
俺達の恋人…Dawn!

エリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達の恋人：Dawn！

【Nコード】

N0877Z

【作者名】

エリカ

【あらすじ】

櫛斗と正哉は、同じ高校から親友だった…あの時までは…正哉が七海に告白するまでは…

正哉の頼み

『なあ…正哉…本当に…いいんだなあ…俺が…七海を幸せにしても』

俺は…空を見上げた…

あの時の…あいつの最後の言葉に…俺は…ずっと…自分に嘘をついていた…

『なあ…權斗……七海を頼むなあ…』

『何!…言っただよ……お前…俺に言ったよなあ…七海を幸せにするって……お前さあ…嘘だろ…なあ…夏実とは、付き合っていないだろ?』

『俺だって…守りてよ…!!』

『だったら……七海と別れるなよ…』

『無理なんだよ……!!!!俺は!!ガンなんだあ…もう…長くないだー!』

『冗談だろ…なあ…正哉…嘘だろ…』

『あっあ…本当だなあーっ』

『………その事…七海は、知ってるのかよ』

『七海には…まだ…言っていない………なあ…權斗…七海の本当の…気持ち知ってるかあ?…』

『……七海の気持ち?…なんだよ』

『七海が本当に好きなのは…權斗…お前なんだよ………七海…俺に解らないよに…隠れて…一人でお前の写真を見ながら…泣いてるだせえ…おまえ…知らねだろ…』

『…七海…が…俺を…』

『お前も…本当は…七海が好きなんだろう…頼むよ…七海を俺の分まで幸せにしてやってくれよ…なあ…權斗…』

これが…病院での正哉との最後の…会話だった

あの時の正哉の頼みで…俺は…七海の本当の…気持ちを知った…

あいつは…俺が七海が好きだった事も解ってた

あいつと俺は、高校からの親友だった…俺達が七海と出会ったのは…

俺達が高校三年生…で七海が…高校一年生だった…

『なあ…權斗…今日も…来てるぞあ』

『本当だなあ…』

あいつとは、三年間…同じバスケットだった…

『本当に七海が好きなんだね…二人とも』

『……何だよ…うるせよ…夏実』

『ハイハイ……』

マネージャーの夏実が…いつも…声をかけて来る…

それを…いつも…正哉が答えていた…

夏実の言う通り…俺達は…本気で七海が好きだった…

『ねえ…七海…七海はさあ…權斗先輩と正哉先輩…どっちが好きなの?…』

『由香理!…!!何!…いきなり…』

『…何ってねえ……冗談だよ…七海』

『……由香理!…!』

応援席での…七海と由香理…の会話だった…

由香理は、その時…すでに…解ってた……七海が俺の事…好きだった事…も

いつも…七海は、俺達の…癒しだった

試合や練習が終わると…七海は、ランチボックスを持って…俺達に…差し入れをしていていた

『お疲れ様…です、差し入れです』

『サンキュー…なあ…七海…』

『上手そうじゃん…七海が作ったの？…食べよぜえ』

あいつの大食いで…食べる姿…七海の嬉しそうなあ…顔…俺は、そんな…二人が…好きだった…

あの時、までは…

あいつが…七海に告白するまでは…

『……何ですか？……こんな所に』

『……俺、お前と…出逢ってから…ずっと…七海……お前が…好きだった…』

『正哉先輩！…私…っ』

『ワリィ…急に言われても…困るよな…』

あいつは…俺よりも…マジだった…

次の日の…朝練習の時に…

あいつから…聞かされた…

正哉の告白

『…なあ…權斗…俺さあ…』

『何！…マジになってんだよ』

『權斗…俺…七海が好きだー』

『正哉…お前…！七海にコクったのかあ？』

『ああ……』

練習が終わった…後に…あいつから…聞かされた…

『……正哉…！…七海を泣かしたら……許さねえからなあ…』

あいつだったから…許したんだあ…

…その日の…お昼休み

屋上で真剣に悩む…七海の姿があった…

『…はあ……っ』

俺は、思わず…七海の頭をぽんと…軽く叩いた…

『……あいつに…コクられたんだって?』

『はい…私、どうすれば…』

『いいんじゃないねえ…あいつと付き合ってやれよ……なあ…七海…』

『でも…私…』

『何…戸惑ってんだよ…あいつだったら…大丈夫だって…なあ』

七海の言葉も気がずに…俺は、あいつに七海を譲った…

その一週間後…七海は、あいつと本当に付き合い始めた…

七海は、ほぼ…正哉と一緒にいることが多くなり…

あいつと俺もバスケ部を引退し…

お互い…進路が決まり

一緒にいることは…無くなった…

卒業…それぞれの旅立ち

そして……卒業間近だった…

ある日の…夕暮れの放課後…

『あれ？……由香理ちゃん…まだ、帰らないの？』

『はい…っ…』

『なあ……見てみ…』

『わああ……綺麗ー』

俺は、一人でいる…由香理に…声を掛けた…

その日は、綺麗な…夕日を…二人で見つめていた

『由香理ちゃん……俺と付き合ってくれない?』

『……えっ……!……權斗せっ……』

由香理からの返事も聞かず……俺は、由香理に……キスをした……

俺は……七海では、無く……由香理を……選んだ……

あれから……三年が立ち

由香理達も……卒業して……

お互い……社会人になった……

由香理は、町にある……役場の職員に

俺は……街中にある……古着屋で店長しながら

働いていた……

俺は…あれから…あいつとは、逢っていないかった…

七海の姿は…何度も見ていたが…

話す事は…無かった

でも…あいつと七海が一緒に住んでる事と七海がひまわり銀行で働いている事は…だけは、知っていた…

噂に聞き…俺は、由香理と婚約する事を決めていた…

七海の涙…正哉からの別れ

『だたいま…何してるの？お兄ちゃん』

『うん？…あっち！…』

『もう…私が入れるから…』

『そうだー！！エリカ…面接どうだった？…あっちっ…フウ』

『まあまあかなあ…そうそう…今日、七海さん…見掛けたよ…綺麗になってたよ…それから…正哉兄と…結婚するみたいだよ』

うちに…由香理と一緒に住み…初めての日

由香理が来るまで…コーヒーいれていたら…

帰って来た…妹のエリカに声を掛けられた

そのときに…エリカに七海の事を聞かされた…

あいつが七海と…婚約することも…一緒に住んでる事も…エリカと
同じ職場だって事も…

初めて…知った…

『そっか…あいつなら大丈夫だろ…そろそろ…由香理来るかなあ…
見てくるわあ』

『……うん』

俺は、そう思っていた…あいつだったら…七海を幸せにしてくれる
って

なのに…あいつは…

『ただいま…どうしたの？正哉くん…』

『なあ…七海っ…』

『うん…あっ！今、ごはん作るね…』

『……俺と別れくれ』

『なんで？…別れるって…』

『俺、今、夏実と付き合ってるだあ…』

『夏実先輩と…嘘でしょ…ねえ』

『ワリィ……俺、しばらく…夏実の所に行くなあ…』

『嘘…でしょ…ねえ…』

あいつは…七海に告げ…そのまま…家を出ていった…

その時…何も知らなかった…俺は…

『あれ？…醤油がない…』

『どうした…？由香理！！』

『醤油…切らしちゃった…』

『俺、買って…来るなあ…』

『でも……』

『すぐ行つて来るわあ…なあ』

俺は、そう言って…家を出た…

醤油を買い…家に戻る途中の夜景の綺麗な公園で…一人でいる七海の姿が…あった

いつもだったら…黙って去るのだが…

その日だけは…違った

『七海じゃん……七っ!』

『あっ……どうしたんだろ?……目にゴミが入ったのかなあ?』

『七海!……お前……泣いてるだろ……あいつと何があったのかよ!……七海!……!』

『……急に別れよって……私……っ……どうしたら……!』

俺は、七海を強く抱き締めながら……あいつをにらみつけた……

七海は……俺の腕の中で……泣いていた……

俺は、そのまま……七海を家に誘った……

『もう……どこまでっ……七海!……どうしたの?』

『由香理……ゴメンね……!』

『うんうん……本当にヒドイなんで!……なんで!……七海を降るなんって……!』

由香理は…七海が来たことに…驚いていだが

七海をそのまま…ソファ―に座らせた…

『エリカ…俺…ちょっと…あいつに逢ってくるなあ』

『……うん……』

俺は、エリカに言って…あいつがいつも…いそうなあ…所を探し回って…

やっと…あいつを発見した…そこには…夏実の姿があった…

正哉の想い…七海の悲しみ

『ちょっと…正哉…飲み過ぎだよ…』

『どうせ…俺は…夏実…くれ』

『駄目!もう…おしまい……權斗っ!』

『おー!權斗…お前も…（バッシー!!…）なんだよー!!』

『ちょっと…權斗…やめなよ』

あいつを…見掛けた瞬間…俺…は…あいつを…殴った…

『なんで!七海を降ったんだよー!!なあ…七海…泣いてたぞあ…っ』

『……俺は』

『俺は…夏実が好きだ…って言いたいだろ…なあ………だったら…七海を好きになるなよー!! (バツシー!!)』

『うるせえなー!! (バツシー!!) だったら…お前が…お前が…七海を好きになってやれば…いいだろ!!』

』

『二人とも…やめなさいー!!』

夏実の…一言で収まったが…最後に俺は…一発…その日は…何度もあいつを…殴ったが…あいつは…一回しか…殴らなかった…

俺は…後悔した…あいつの…体に…赤信号だった事を…

『正哉…これで良かったの?』

『……悪かったなあ…夏実』

『いいけど…本当にこれで良かったの?』

『これでいいんだ…俺、一旦…家戻ってから…行くなあ』

『……解った…看護婦に伝えて置くから…』

二人がこんな会話をしたなんて…俺は…知らなかった…

『……私、帰るね…由香理やエリカちゃんに…それに權斗さんにも…迷惑だし』

『そんな事…』

『いいの…それに…由香理の幸せを壊しちゃったら…ヤダからね…それじゃあ』

カッチャ……♪!

『ただいま…七海?』

『お兄ちゃん…その傷…!』

『ああ…大丈夫…だあ』

そのまま…七海の方を見た…

『すみません…私、帰りますね…お邪魔しました…エリカちゃん…
職場でね』

七海が家を出よとした…瞬間…俺は…

『七海…っ!…もう少し…いろ…なあ…』

思わず…七海の腕を掴んで引き止めた…

でも…七海は…

『いっぱい…泣いて…スッキリしたから…もう大丈夫…』

『じゃあ…近くまで送ってぐよ』

大丈夫って…言って帰ると言う…七海を再び引き止めて

七海を近くまで送っていた…そんな俺は…由香理の存在を…忘れていた…

『星がキレイ…權斗さん…由香理と結婚するんですか?』

『そのつもりだけど…』

『私も…今頃…正哉君に…言われたのかなあ…』

『……七海…っ?』

『結局…駄目だったけどね…あれ?…あんなに…泣いたのにな…』

『七海…っ!…!』

『…………えっ！…………かつ……………』

そんな、七海の姿見て…前を…向いている七海

を後ろから…抱き締めで…無理矢理…自分の方に振り向かせて…

初めて…七海にキスをした…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877z/>

俺達の恋人…Dawn!

2011年12月8日19時08分発行